「書評：『戦間期中東における英日貿易抗争』」の補足説明

——著者・清水洋氏に答える——

岡野内（おかのうち）　正（ただし）

清水洋氏の著書に対する拙評（『アジア経済』第28巻第8号　1987年8月　97～101ページ）に対して著者よりコメントをいただいた。拝読させていただいたところ，拙評には日本の社会科学の伝統，特に国際経済学会での過去の議論を暗黙の前提とした叙述があり，海外で仕事をされる著者の疑問ももっともであると思われた。そこで，以下3点にわたって補足説明をしておきたい。

第1に「ダンピング」について。拙評98ページにおいて「『ダンピング』説の側からも十分に包摂されうる」と書いたのは，すぐ次の文で示唆しておいたように，当時の論壇をにぎわした「ソーシャル・ダンピング」論を念頭においてのことである(注1)。評者自身の論議を今少し展開すれば，「ダンピング」なる言葉はあまりに多義的であり(注2)，それについて論ずる場合には，論者自身の「ダンピング」規定を明確にしておく必要があろう，ということになる。もっとも，コメントによれば清水氏は「ダンピング」論議じたいを止揚しうるような「プロダクト・サイクル」論の展開を構想されているようなのでそれを期待したい。

第2に「貿易の利益」について。拙評101ページにおいて，清水氏の「貿易の利益」に関する把握のしかたについて「あまりに単純な自由貿易論」と評したのは，同じ文章で示唆しておいたように，「従属論」との関連で再び活発化している「D・リカードウ以来の国際価値論争」(注3)を念頭においてのことである。この論争を実証的な見地から発展させるうえで有用な資料が著書に見出されるように思われたため，この著書のもついわば「思わざる」意義について注意を換起するためにこのような評を行なった次第である。99ページで「著者も引用するデイビス」やティグナーの著作をもちだしたのも，「従属論」に関する本書の同様な意義を感じたためである。

最後に本書がこれまでの戦間期世界経済史像にとってもつ意義について。拙評101ページで，わざわざ「一経済史家」(an economic historian) という著書276ページの言葉を引用したのは，清水氏の実証史家としての自己限定に敬意を表してのことである。というのはこの言葉に続くくだりで清水氏は，戦前の研究者にとっては利用不能であり，1971年以後の研究者によっても放置されてきた中東関係の資料の全面的な調査を担当した研究者として発言され，これまでの戦間期世界経済史の常識的事実との対応をひかえめに確保されるにとどめておられるからである。このような清水氏の態度ゆえに，本書はこれまでの世界史像の見直しにとっても有用たりうる，というのが拙評末尾の趣旨なのである。

（注1）　1934年6月の国際連盟労働会議が開かれる直前の二様の反応については，高橋亀吉『ソシャル・ダンピング論』千倉書房　1934年／向坂逸郎「ソシァル・ダンピング」（『改造』第16巻第7号　1934年6月）13～30ページを参照。戦後も含めて論争整理としては，小段文一「貿易と賃金問題——昭和期（戦前）を中心として——」（松井清編『近代日本貿易史』第3巻　有斐閣　1963年）152～195ページ，がある。

（注2）　価格差別の有無を基準とするヴァイナー以来の分類（Viner, Jacob, *Dumping: A Problem in International Trade*, シカゴ, University of Chicago Press, 1923年，第I章）の他，ドイツ的伝統にたつ「経済政策的」「私経済的」という2種のダンピングを区別する例もある（Pütz, Theodor, "Dumping," *Handwörterbuch der Sozialwissenschaften*, 第3巻，ゲッチンゲン，Vandenhoeck & Ruprecht, 1961年，13～14ページ）。日本のマルクス経済学的伝統をふまえた独特の整理としては，岡倉伯士『国際貿易理論——独占と貿易——』有斐閣　1959年　第7章「ダンピングと国際カルテル」を参照。

（注3）　日本での論争については国際経済学会によるアンソロジー，木下悦二編『論争　国際価値論』弘文堂　1960年，最近の「従属論」との関連についてはフランスでの論争のアンソロジーの訳本であるA・エマニュエル；S・アミン；C・ベトレーム；C・

パロワ著　原田金一郎訳『新国際価値論争』柘植書房　1981年（原書 Amin, S.; C. Bettelheim; A. Emmanuel; C. Palloix, *Imperialismo y comercio internacional: el intercambio desigual*, メキシコ, Ediciones Pasado y Presente, 1971年）補章所収のシンポジウム，特に中川信義氏の報告「旧国際価値論争の総括――国際価値論争の現段階――」を参照されたい。

（法政大学助手）